

『四分律』考

—病—

渡 邊 幸 江

はじめに

四分律はブッダ入滅後の部派仏教時代に、各部派が保持した律のうち上座部系の法藏部が伝えた教団規律の集成である。十誦律・五分律・摩訶僧祇律と共に「四大広律」と呼ばれ、中国には後の五世紀初頭、姚秦時代にカシミールから仏陀耶舎がもたらし、竺仏念と共に漢訳された。本論は『四分律』薬毘度部を中心に、顛狂の比丘と鬼神の関係をとり上げ考察を試みた。中心となる原文は下記の通りである。

- ① 爾時世尊在王舍城。時有顛狂病比丘。至殺牛處。食生肉飲血。病即差。還復本心畏懼。諸比丘白佛。佛言不犯。若有餘比丘。有如是病。食生肉飲血病得差者。聽⁽¹⁾食。
- ② 時有信敬沙門鬼神。即令馬死。於彼得馬肉食之。世尊慈愍告諸比丘。此是王之兵衆。若王聞者必不歡喜。自今已去。不應食馬肉。爾時比丘。於波羅奈國乞食不得。至能水底行人所乞。時有信敬沙門鬼神。令諸龍死。於彼得龍肉食之。⁽²⁾

①は顛狂の比丘が牛を殺し、その生肉と生血を飲んだ所業が説かれている。生肉と生血の飲食によって顛狂の比丘は本心を取り戻し、比丘は自らの所業に驚くのである。この薬用人肉食に関する先行研究は、岡田真美子氏の「薬施捨身説話(3)薬用人肉食の問題」にも示されるように「薬用の肉食」と「人肉食」を共にした「薬用人肉食」は意外にも種類がなく、「病比丘への腿肉施」研究に依存する状況である。次の②は鬼神である。鬼神が馬肉と龍肉を食するという所業を取り上げた。この件に関する先行研究も岡田氏による「龍本生

(2) 救飢捨身譚説話—根本説一切有部薬事を中心に⁽⁴⁾に、これまでの先行研究にも取り上げられたことがない「龍本生」を取り上げて、「龍本生」と説話の成立を論じている。

本論は上記原文を用いて、肉食と病の關係と顛狂と鬼神の所業に焦点を当てた検討となる。また、この顛狂比丘については、平成 24 年 10 月の曹洞宗研究所学会でその一部を発表し、顛狂病の比丘の「顛狂」の定義を中国医学から考察した。本論では鬼神と中国医学について、さらに範囲を広げた検討とした。

1、顛狂比丘

顛狂について『四分律』には他にも提示がある。例えば下記である。

時有顛狂比丘。殺人後還醒了疑。佛言無犯。若心錯亂爲苦痛所惱。一切無犯⁽⁵⁾

ここに見る仏の言は無犯である。『四分律』には「狂心亂痛惱所纏無犯」⁽⁶⁾「佛言。癡狂心亂痛惱所纏。一切無犯⁽⁷⁾」とあることから、心が狂乱し、そのために生じる痛みが身に纏いつくほどの尋常でない苦しみであるならば、仏は無犯とされ破戒にはならないのである⁽⁸⁾。曹洞宗研究所学会ではその原因について三点を提示した。ここでは概略を示したい。一つは我が子を亡くした結果の狂乱である。『毘達磨大毘婆沙論』『別譯雜阿含經』には下記の記載がある。

喪失六子心遂狂亂。追念子故露形馳走。⁽¹⁰⁾

爾時婆私吒婆羅門女。新喪第六子。爲喪子故。心意錯亂。裸形狂走。⁽¹¹⁾

婆私吒喪第七子。心不愁憂。亦不苦惱。亦不追念裸形狂走。⁽¹²⁾

次には戒律を持守しない比丘を狂乱者としている。『四分律』にもそれを見ることが出来る。

此難提比丘。癡狂心亂多犯衆罪。言無齊限。出入行來不順威儀。⁽¹³⁾

そして、『十誦律』にある「心散乱」であり、仏は五種の因縁を挙げている。また、『十誦律』にも「病壞心」として四種（風・熱・冷・三種俱）と時節（節

気)の因を挙げているが、特に「散亂心」に見る非人に注目し、前述の曹洞宗研究所学会では景山教敏氏の論文⁽¹⁴⁾を紹介した。

云何名散亂心。佛言。有五種因緣。令心散亂。爲非人所打故心散亂。或非人令心散亂。或非人食心精氣故心散亂。或四大錯故心散亂。或先世業報故心散亂。比丘有是五種散亂心。自覺是比丘。犯波羅夷。若不覺知不犯。

問佛言。病壞心人不犯。云何名病壞心人。有五種病壞心。或風發故病壞心。或熱發故病壞心。或冷發故病壞心。或三種俱發故病壞心。或時節氣發故病壞心。⁽¹⁵⁾比丘有是五種病壞心。若自覺是比丘。得波羅夷。若不自知不犯。

非人という、鬼神や夜叉等々の人に有らざる者による病は（如羅刹鬼飲肉食⁽¹⁶⁾）、人々にとっても顛狂の比丘が尋常でない所業（生肉を食い血を飲む）を羅刹に依るものとし、顛狂の比丘の特殊な病態と解釈したのではないかと想像する。

ところで、中国医学における顛狂は前述の学会でも一部を述べ、その治法として瀉血を提示したが、顛は「癲」と同義と捉え、癲狂のうち、まず「癲」が陰陽では陰に属し病態は静を特徴とする。一方、「狂」は陽に属し病態は動を病態とする。この2つの病証は症状に明確な区別がなく出現するため、临床上は一括して癲狂と称するのである。『靈枢』「顛狂二十二難」には次の記載がある。

①癲疾始生。先不樂。頭重痛。視舉目赤。甚作極。已而煩心。候之于顔。取手太陽陽明太陰。血變而止。

癲疾始作。而引口。啼呼喘悸者。候之手陽明太陽。左強者攻其右。右強者攻其左。血變而止。

癲疾始作。先反僵。因而脊痛。候之足太陽陽明太陰手太陽。血變而止。（中略）嘔多沃沫。氣下泄。不治。癲疾者。疾發如狂者。死不治。

②狂始生。先自悲也。喜忘苦怒善恐者。得之憂飢。治之取手太陰陽明。血變而止。及取足太陰陽明。狂始發。少臥不飢。自高賢也。自辯智也。自尊貴也。善罵詈。日夜不休。治之取手陽明太陽太陰舌下少陰。視之盛者皆取之。不盛

釋之也。

狂言驚善笑、好歌樂、妄行不休者、得之大恐、治之取手陽明太陽太陰。

狂目妄見、耳妄聞、善呼者、少氣之所生也、治之取手太陽太陰陽明、足太陰、頭兩。

- ③狂者多食、善見鬼神、善笑而不發于外者、得之有所大喜、治之取足太陰太陽陽明、後取手太陰太陽陽明、狂而新發、（中略）短氣、息短不屬、動作氣索、補足少陰、去血絡也。

まず①は顛についての記載である。現代語訳は小曾戸丈夫・浜田善利氏著『意積黄帝内経靈枢』を参照した。⁽¹⁷⁾

顛疾の発作直前に、病人は不愉快な気持ちになり、頭が痛んで重く、上目づかいになりがちで眼が赤く充血することがあり、発作が極限に達すると心煩して苦悶する。その時は手の太陽・陽明・太陰経絡から瀉血して顔の色沢が正常になれば瀉血を止めよという。

また、顛疾の発作直前に、病人は口を痙攣させて声をあげ、息遣いが荒くなり心臓部を波打たせることがある。この時は手の陽明・太陽経絡の左右を比較し左側が強い時は右を瀉血し、右側が強い時は左側を瀉血する。顔の色沢が正常になれば瀉血を止めよである。

そして、顛疾の発作直前に、反り返って倒れ、そのために背の疼痛を訴える者がある。このときは足の太陽・陽明・脾経と手の太陽経絡から瀉血する。そして顔の色沢が正常になれば瀉血を止める。（中略）もし唾を沢山吐き、下からは締りがなく放屁するような状態になると、これは不治である。顛疾に罹患した病人で発作の時に凶暴になれば、それは死症であるという。このように顛疾は陰に属する病態であるとはいえ、病態は陽性病態も含み深刻である。

次に②と③は狂についての記載である。

狂病の発作直前に何事もないのに悲しみ記憶力がなくなり、すぐに怒り出し、またよく恐れる者がある。この原因は精神的に憂鬱過度になったためか、飢餓になったためである。（治法は顛疾に同等）

また、狂病の発作が起こった時は不眠となり、飢餓感を覚えず、自ら賢者ぶって知識をひけらかし、貴尊をほこり、日夜を問わず他人を罵る者がある。（中略）狂言や妄語を発して驚き易く、よくバカ笑いをし歌を歌い、正常でな

い行動をとってじっとしていない者が強い恐怖が原因である。（中略）狂病で幻覚があり、異様なものが見えたり聞こえたりして、よく驚き恐れて叫ぶ者がある。これは精気の虚（失調）が原因であるという。

そして③には狂病で異常に食欲が亢進し、しばしば幻覚で鬼神を見、含み笑いをして笑いを発しない者がある。これは喜びすぎて精神の異常を起こしたのであるという。

このように、中国古典医学書の狂病の項には、肉体的な飢餓状態と、その逆に飢餓感が感じないという、食欲に関する異常病態が精神疾患病態と共に記されている。そして、鬼神を見るなどの指摘もある。これらのことから鬼神の所業における異常範囲は、精神と肉体の両面から捉えなければならないと考える。

2、食と鬼神

懐奘禪師筆録『正法眼藏随聞記』に次の記載がある。

有時示シテ云ク佛照禪師ノ會下ニ一僧アリテ病患ノトキ肉食ヲ思フ照是ヲ許シテ食セシムアル夜自ラ延壽堂ニ行テ見タマヘバ燈火幽ニシテ病僧亦肉ヲ食ス時ニ一鬼病僧ノ頭ベノ上ニノリイテ件ノ肉ヲ食ス僧ハ我ガ口ニ入ルト思ヘドモ我ハ食セズシテ頭上ノ鬼ガ食スルナリ然シヨリ後ハ病僧ノ肉食ヲ好ムヲバ鬼ニ領ゼラレタリト知テ是ヲ許シキト

ここには、仏照禪師門下の一人の僧侶が病気の治療として肉食を願い、それを仏照禪師は許し食べさせたとある。ある夜、禪師は延寿堂、いわゆる病僧寮（病室）に行き、病気の僧を見られた。すると、燈明のぼんやりとした灯りに病気の僧が肉を食べていた。ところが、よく見ると、一匹の鬼が病気の僧の頭に乗ってその肉を食べている。僧は自分の口に入るものと思っているが実は自分が食べているのではなく、僧の頭の上にいる鬼が食べていたのだ。そのような事があってからは、病気の僧が肉を食べたいと肉食を好むのは、鬼に心を占領されているからと知り、病気の僧の肉食を許したという。つまり、病気の僧の病は鬼の仕業であり、僧自身の破戒とはならないので不犯である。鬼であれば致し方ないのかもしれない。

この『随聞記』について、本学、石井修道教授は印象深いと言われ柳田国男

の『故郷七十年』を引かれている⁽¹⁸⁾。それは、柳田が十三歳の時に長兄に身を寄せた時のことで、地藏堂での一枚の絵馬が産褥の女が八巻を占めて生まれたばかりの嬰兒を押さえつけているという悲惨な絵で、その女の影が障子に映っていて、角が女に生えている。その傍らに地藏様が立ち泣いているというものである。石井教授はこの件に「これはたびたびおこる飢饉の時、我が子を犠牲にするしか方法を選べなかった当時の過酷な状況を読みとったのである。極限状態におかれたその時の人間の弱さや愚かさを深く心に刻むと共に、心に巣くう「鬼」とは何かを考えさせられる」と語られている。鬼とは何か。石井教授の一言は人の心の無明を今更ながらに思うところである。過酷苛烈な状況に於いては止むを得ないとしか言えないだろうが、それでは許される肉食はあるのだろうか。

原始仏教における飲食物については、中野義照氏に早くも「原始仏教における飲食物」の提示があり、そのなかで「三、肉食と飲酒の問題」を取り上げられている⁽¹⁹⁾。中国仏教では、すでに大正十三年、桑原隲藏博士による「支那人間に於ける食人肉の風習⁽²⁰⁾」が詳細であり、博士の論を引かれ道端氏も中国仏教と肉食の関係「円仁の巡礼記を縁として」の副題で「中国仏教と食人肉の問題」、また「中国仏教と肉食禁止の問題」を論じられ⁽²¹⁾、中国に於ける肉食の推移を提示されている。

ところで、「中国仏教と触人肉の問題」のなかで桑原博士は、食人肉の比較的普通の動機を五つ挙げている。具体的には飢饉の時、籠城して糧食尽きた時、嗜好品として、増悪の場合、医療の目的の五つである。上記『随聞記』で石井教授は柳田国男の話しを引かれたが、この状況がまさに飢饉の時であるから、人肉の食を責めることはできないだろう。

また、桑原博士は上記五種の最後に、医療を目的とする食人肉が比較的普通の動機として、中国では唐代からあると述べ、『本草拾遺』を挙げられている。その『本草拾遺』の記載は、「人肉可療羸疾」である。つまり、人肉は羸疾の治療薬だというのだ。羸疾とは痩せ衰える病を指す。

中国医学では、羸疾を次のように解している。『金匱要略』「桂枝芍薬知母湯方」に次の記載がある。

桂枝四兩、芍薬三兩、甘草二兩、麻黄二兩、生薑五兩、白朮五兩、知母四兩、防風四兩、附子二兩、炮、右九味、以水七升、煮取二升、温服七合、日三服。

味酸則傷筋。筋傷則緩。名曰泄。鹹則傷骨。骨傷則痿。名曰枯。枯泄相搏。名曰斷泄。榮氣不通。衛不獨行。榮衛俱微。三焦無所御。四屬斷絕。身體羸瘦。獨足腫大。黃汗出。脛冷。假令發熱。便爲歷節也。病歷節不可屈伸。疼痛。烏頭湯主之。

本薬は、桂皮（けいひ）3g、知母（ちも）3g、防風（ぼうふう）3g、生姜（しょうきょう）3g、芍薬（しゃくやく）3g、麻黄（まおう）3g、蒼朮（そうじゅつ）または白朮（びやくじゅつ）4g、甘草（かんぞう）1.5g、附子（ぶし）1gを和合した合成薬である。特に防風や附子は身体の激痛に薬効のある生薬であり、本薬は関節リウマチや神経痛のために発生する、めまい、関節の痛み、皮膚の乾燥、吐き気、体重減少、脚部のはれやむくみなどの症状を緩和する薬効を持つ。つまり、羸疾は単なる体重減少という疾患を指すのではなく、身体関節各部の激痛を持つ体重減少という病態なのである。そして、その病に『本草拾遺』は人肉を治療薬とする。緊急を要する病態には、人肉が薬効を発揮するのだろうか。

3. 正食⁽²²⁾

正食は仏教では時食を指す。下田正弘氏の「三種の浄肉」再考⁽²³⁾には、部派における肉食制限の方向性が論じられ、食用肉の種類として象肉や狗肉等の食の禁止に関する論が提示されている。だが、初期原始仏教の頃には、教団における肉食は時薬なのである。法顕訳の摩訶僧祇律に次の記載がある。

時薬者。一切根一切穀一切肉。根者。（中略）穀者。（中略）肉者。水陸虫肉。云何水虫。水虫者。魚龜提彌祇羅修羅。修修羅修磨羅。如是等水中諸虫可食者。是水名水虫。云何陸虫。陸虫者。兩足四足無足多足。如是等名陸虫。如是根食穀食。肉食。皆名時食。何以故。時得食。非時不得食。是名時食⁽²⁴⁾。

時食は午前中に食べる食であり、戒律に則った正常な食事である。義浄の『根本薩婆多部律攝』には、

言時薬者。謂五正食。一麩。二飯三麥豆飯。四肉。五餅及五嚼食等。此並時中

合食故。名時藥。⁽²⁵⁾

とあり、同じく『根本説一切有部毘奈耶藥事』にも肉は時藥であり時藥の認識となる。

一時藥。二更藥。三七日藥。四盡壽藥。言時藥者。一麩。二餅。三麥豆餅。四肉。五飯。此並時中合食。故名時藥⁽²⁶⁾

三種淨肉については『四分律』に

得魚。佛言。聽食種種魚得肉。佛言。聽食種種肉得羹。⁽²⁷⁾

とあることから、肉であっても布施されたものであれば仏は食を許し禁止されてはいないのである。ところが、同じ『四分律』に

有五種肉不應食。象肉馬肉人肉狗肉毒蟲獸肉。是爲五。⁽²⁸⁾

とあり、前述の道端氏はさらに『涅槃經』卷十八を引き、肉食の禁止が全面的に確定したのかについては問題すべきところと述べられている。また、下田氏も「東アジア仏教の戒律の特色⁽²⁹⁾」のなかで、肉食禁止の由来をめぐる論を展開されている。つまり中国における肉食の推移はさらに検討されなければならないのである。

三種の淨肉について『四分律』には下記の記載が見られ、

還僧伽藍中。以此因緣集比丘僧告言。自今已去若故爲殺者不應食。是中故爲殺者。若故見故聞故疑。有如此三事因緣不淨肉。我說不應食。若見爲我故殺。若從可信人邊聞爲我故殺。若見家中有頭有皮有毛。若見有脚血。又復此人能作十惡業常是殺者。能爲我故殺。如是三種因緣不清淨肉不應食。有三種淨肉應食。若不故見不故聞不故疑應食。若不見爲我故殺。不聞爲我故殺。若不見家中有頭脚皮毛血。又彼人非是殺者。乃至持十善。彼終不爲我故斷衆生命。如是三種淨肉應食。若作大祀處肉不應食。何以故。彼作如是意辦具來者當與。是故不應食。若食如法治⁽³⁰⁾

ことさらに殺されたものは食べることを禁止している。このことさらとは見聞

疑の三種の不浄肉を指す。自分のために殺すのを見たり聞いたり、それを疑う場合である。したがって、不見・不聞・不疑、すなわち自分の為に殺す場合や、見ず聞かず疑わぬ魚や肉は食べて良いとも解釈されるのである。⁽³¹⁾

それではなぜ肉食をしてはいけないのかといえ、大慈の種を断ずるからである。北涼の曇無讖訳『大般涅槃經』第四卷如来性品には下記の記載があり、肉食は大慈悲の種を断ずるために食を許さないとしている。また三種の淨肉について迦葉はどうするのかと問い、仏は事に随いて漸漸に制するものであり、さらに十種の不浄肉や九種の清浄肉についても仏は漸次に制するのだという。

善男子。從今日始不聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時。應觀是食如子肉想。迦葉菩薩復白佛言。世尊。云何如來不聽食肉。善男子。夫食肉者斷大慈種。迦葉又言。如來何故。先聽比丘食三種淨肉。迦葉。是三種淨肉隨事漸制。迦葉菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。十種不淨乃至九種清淨而復不聽。佛告迦葉。亦是因事漸次而制。⁽³²⁾

また、なぜ仏は肉食を五種の時薬に加えたのか。十誦律には次の記載がある。

爾時諸比丘入王舍城乞食。時有白衣。以 34 蘆蔔葉胡荽葉羅勒葉雜食與諸比丘。諸比丘不食故。不得飽滿。復更羸瘦無色無力。佛知故問阿難。何以故。諸比丘羸瘦無色無力。阿難答言。世尊。聽諸比丘噉五種佛陀尼食自恣受。諸比丘入王舍城乞食。時有白衣。以蘆蔔葉胡荽葉羅勒葉雜食與諸比丘。諸比丘不食不得飽滿故。羸瘦無色無力。佛聞已語諸比丘。從今聽食五種蒲闍尼食。謂飯麩糲魚肉。五種食自恣受。是諸比丘入王舍城乞食。時諸白衣以蘆蔔葉胡荽葉羅勒葉雜食與諸比丘。諸比丘不食復不飽故。羸瘦無色無力。佛見諸比丘羸瘦無色無力。知而故問阿難。何故諸比丘羸瘦無色無力。阿難答言。世尊。聽食五種食。諸比丘入城乞食時。得蘆蔔葉胡荽葉羅勒葉雜食與諸比丘。諸比丘不食復不飽滿故。羸瘦無色無力。佛言。從今聽食五種似食自恣隨所雜。⁽³³⁾

ここに見る乞食は、得られる食事内容があまりに貧しく、そのため諸々の比丘が羸瘦無色無力になっていったという。羸瘦は前述した『本草拾遺』に見る「人肉可療羸疾」の羸疾である。

ところで、先日まで論者はドイツ南西部のヘルクスハイム（Herxheim）の新

石器時代の遺跡で発掘された人骨が2009年に発見されたことを知らなかった。これはインターネットによる記事であり確認を論者は怠っているが、ドイツ南西部で古代に食人習慣を示す大量の人骨が発見されたとの研究報告が、英考古学専門誌「Antiquity」に掲載され、研究は仏ボルドー（Bordeaux）大学のブルーノ・ブーレストン（Bruno Boulestin）氏を筆頭にした仏独合同考古学チームであるという。場所はドイツ南西部のヘルクスハイム（Herxheim）にある新石器時代の遺跡で、幅約250メートルの発掘現場の半分近くを発掘し、細長穴の中から肉を食べたと想像される約500体の人骨が出土したというのである。全体の発掘が終われば、さらに1000体以上が見つかるかと推定されるらしいが、研究チームによれば成人や子供のほか乳児の遺骨も見つかっており、これらの人骨には食用に解体された動物の骨と同じような、故意に切断された形跡があったとのことである。今回の遺跡は、社会的暴力が存在していたと推定される紀元前5300～4950年の新石器時代末期に、大規模な食糧危機が起きたことを示す証拠である可能性があるという。

ここには発見された人骨の分析から、飢餓状態という食糧確保と生命保持のために、人肉が新石器時代から食されていたという可能性が示されている。前述の本学石井教授の言われる心に巣くう鬼の存在は、さらに文化文明が発達し一定の基準を得た時代の感慨であるが、新石器時代に正常な生命維持のためとはいえ、それを食する者の心に何ら鬼神の影はなかったのだろうかと思うのである。

そこで、つぎに中国医学における鬼神の定義を見てみたい。

4、中国医学に見る鬼神

『素問』「五藏別論篇第十一」に次の記載がある。「五藏別論篇第十一」は治療原則を示すもので、その中に次の記載がある。

拘於鬼神者，不可與言至徳。悪於鍼石者，不可與言至巧。病不許治者，病必不治。治之無功矣。

鬼神、つまり巫女や方士を頼りにする迷信家は、最上の徳（ここでは優れた医術の徳）を語る資格はなく、鍼やメス（石）での治療を嫌がる（悪む）者は巧みな技術を語る必要はない。病気になり治療を拒否する者には決して医療を施

してはならない。これらの者達にたとえ慈悲心から治療しても、本人に気がないので治療効果が上がらず治ることはないというのである。

古代中国においては、医療は呪術と一体であり、漢字の「医」は繁体字では「醫」につくる。また、他に醫の酉の部分に巫になる字もある。「醫」の原義は酒壺に薬草をつけて薬を作ったためとも言われ、さらに上古時代には巫が神に仕えるシャーマンの仕事ともなっていたという。だが、上記『素門』の記載からは、中国のごく早い段階で医療と呪術・巫術を分離する動きが読み取れる。それが、『黄帝内经』素問・五臓別論に見られるところで、五臓六腑の作用を記した後で明確に「拘於鬼神者不可与言至徳」と述べ、医学と宗教的観念の判別を示しているのである。

また、同じく素問の宝命全形論では、天地陰陽の法則に順従する重要性を述べた後、「道無鬼神＝天地陰陽の法則に鬼神の類はかかわりが無い」を示し、医療と宗教的観念の違いを述べている。『黄帝内经』は前漢のころ、紀元前2～1世紀ごろに編纂されたというのが定説であるから、少なくとも医学の世界では医学と呪術を切り離そうとしていたのだらう。だが、それは皇帝や貴族社会のことではないだろうか。市井の患者側がそのように考えていたとは思われない。やはり、鬼神は存在し、その所業は尋常とは思われない病態として、病に苦しむ人々に降ってかかるものと考えていたのではないだろうか。

中国の周時代の秦時代、伝説的な思想家であり函谷関を守衛する役人であったと言われる尹喜の『関尹子文始真経』五鑑篇に、次の記載がある。ここには様々な鬼の種類と鬼が取り付く様が説かれている。

心蔽吉凶者。靈鬼撰之。心蔽男女者。淫鬼撰之。心蔽幽憂者。沈鬼撰之。心蔽逐放者。狂鬼撰之。心蔽盟詛者。奇鬼撰之。心蔽藥餌者。物鬼撰之。如是之鬼。或以陰為身。或以幽為身。或以風為身。或以氣為身。或以土偶為身。或以彩画為身。或以老畜為身。或以敗器為身。彼以其精。此以其精。兩精相搏。則神応之。為鬼所撰者。或解奇事。或解異事。或解瑞事。其人傲然。不曰鬼于躬。惟曰道于躬。久之。或死木。或死金。或死繩。或死井。惟聖人能神神。而不神于神。役万神而執其機。可以会之。可以散之。可以禦之。日応万物。其心寂然。⁽³⁴⁾

鬼が取り付いて為すとは、ある時は奇怪な事、ある時は異常な事、ある時は吉

祥な事である。その人は傲慢にも鬼が我が身に付いているとは言わないで、道が身に付いていると言うのである。この記載は前述の『随聞記』に相当する箇所である。

そして、それが長くなると、ある者は木により、ある者は金により、ある者は縄により、ある者は井戸で死ぬ。ただ徳を得た聖人は神秘的なことをするが、それは神のなすことであっても神秘的なことではない。全ての神秘的な力を使いその機能を自分のものとするので、これを会わせ散らし制御することができる。日は万物に应じるが、その心は静まり返っていると述べている。

この一文から鬼神の所業も様々であることが知られるが、日を仏教に置換すれば仏の慈悲心は清浄であり寂然としているとも解釈できる。

考察

顛狂の比丘は人肉を食し、顛狂を平癒させる。なぜ顛狂になるかについては、上記に考察したように乞食をしても得られる食物が貧しいからである。身体は羸瘦無色無力となり、痩せ細り正常な精神活動すら営むことが難しい。そうであれば人肉を食らうという所業も致し方なく、さらに中国医学による羸疾から鑑みれば、激痛を伴う体重激減であるから人肉の食も許すしかないだろう。そして、その所業も鬼神による飢餓や病魔と考えれば、『随聞記』や尹喜の『関尹子文始真経』に見る通りであり、人の業ではないのである。

ところで、『十誦律』に次の記載がある。

佛先説不得食生肉血。若病餘藥不能治者。得食不。佛言。得食。若餘藥能治差者不得食。食者。⁽³⁵⁾

上記は、もし病が他の薬により治癒を見ない時はいかがだろうかという問いに、私は食を許し、その一方ではもし薬による平癒が可能ならば食べることを禁じている。つまり、薬で治る病は身病の段階であるから服薬が最良の治法である。だが、薬による治薬薬効が期待できなければ、それは心病であるから（非人による発病に等しくなることから）、如何なる所業も許す立場を取ると言われる。人肉の食を中心に検討を加え中国医学や鬼神にも触れたが、人肉が薬になるならば、それも身の病の一種と考えたい。

最後に、周知のように『涅槃経』に見る阿闍世王の皮膚疾患（父王を殺した

心悩によって崩れ病む皮膚病) に対し、耆婆は不能治であるとして仏のもとに阿闍世王を連れていく。仏は月愛三昧に入り、その清浄な光を浴びた阿闍世王の皮膚疾患は完治したという。

ところで、この阿闍世王に人肉は薬効があるだろうか。いや、それはないのではないだろうか。尹喜の『関尹子文始真経』に見た「日応万物。其心寂然」も、仏の「月愛三昧」も苦の果てにたどり着いた救いである。人肉の段階ではないだろう。雑駁な考察となってしまった。今後さらに検討を重ねたい所存である。

注

- (1) T22,p.868b.
- (2) T22,p.868b.
- (3) 岡田真美子「薬捨身説話(3) 薬用人肉食問題」(『印度学仏教学研究』第42巻、第一号、日本印度学仏教学会、1993年) 参照。
- (4) 岡田真美子「龍本生(2) 救飢捨身譚と龍肉食説話—根本説一切有部薬事を中心に」(『神戸女子大学紀要』第26巻、神戸女子大学、1993年) 参照。
- (5) T22,p.983a.
- (6) T22,p.572b.
- (7) T22,p.990a.
- (8) 「戒律と食物の関係」平川彰(『禅文化研究所紀要』第9号、禅文化研究所、1977年) 参照。
- (9) 小池清廉「狂者不犯及び狂比丘の復権について」(『仏教学研究』(66)、龍谷仏教学会、2010年) 参照。
- (10) T27,p.429b.
- (11) T2,p.405b.
- (12) T2,p.405b.
- (13) T22,p.914c.
- (14) 景山教敏「仏教教団ではどの様に癒しを行っていたか—律藏經典群から読みとれる疾病誌について—」(日蓮宗現代宗教研究所、所報第35号、p.72) に「二 非人病について、(一) 漢訳文献の非人病」と題し、『摩訶僧祇律』、『十誦律』、『四分律』を取り上げ、また、『南伝大蔵経』と古典医学書に見られる非人病として『チャラカ・サンヒター』から、「人間に憑依して超人的な行動させる憑き物を羯羅訶 (graha) と呼び、(中略) とくに羅刹は血肉を好むこという」。また古典医学書の『スシュルタ・サンヒター』についても、「非人病の患者に同じように動物の血肉が与えられているが、それは食べ物として処方されるのではなく、祈祷の呪文によってお払いが成就するようにお供物として捧げられた。そして、この祈祷法で解決できないとき、経験的な合理医学による治療法が示されおり、古典医学に見える鬼神学は、明らかに漢訳文献に見える

非バラモンのな治療法が、正統バラモンの知的伝統に沿って位置づけられたと理解できる」と記している。

- (15) T23,p.424b。
- (16) T9,p.719b。
- (17) 小曾戸丈夫・浜田善利氏著『意积黄帝内经靈枢』（株）築地書館、1996年）参照。
- (18) 石井修道「中国禅僧伝から6話」（『大法輪』2001年）参照。
- (19) 中野義照「原始仏教における飲食物」（『印度学仏教学論叢、山口博士還暦記念』、法蔵館1955年）参照。
- (20) 桑原隲藏「支那人間に於ける食人肉の風習」（『東洋學報』、第14巻、第1号、1924年）後「東洋文明史論叢」に所収）参照。
- (21) 道端良秀「中国仏教と食人肉の問題（円仁の巡礼記を縁として）」（『慈覚大師研究』、天台学会1964年）。「中国仏教と肉食金氏の問題」（『大谷学報』第46巻、第2号、大谷学会、1966年）参照。
- (22) 森章司「原始仏教聖典に見る釈尊と仏弟子たちの一日」（『中央学術研究所紀要』、中央学術研究所2011年）参照。
- (23) 下田正弘「三種の浄肉再考一部派における肉食制限の方向一」（『佛教文化』、第22巻、通巻25号、東京大学仏教青年会、1989年）参照。
- (24) T22,p.244b。
- (25) T24,p.569c。
- (26) T24,p.001a。
- (27) T22,p.866c。
- (28) T22,p.1006a。
- (29) 下田正弘「東アジア仏教の戒律の特色 肉食禁止の由来をめぐって」（『東洋学術研究』第29巻、第4号、東洋哲学研究所、1990年）参照。
- (30) T22,p.872b。
- (31) 伊藤千賀子「兎王本生における肉食による位相」（『印度学仏教学研究』、第35巻、第二号、日本印度学仏教学会、1987年）参照。
- (32) T12,p.386a。
- (33) T23,p.091b。
- (34) 心が吉凶のことでいっぱいになるとは、靈鬼がこれを代行していることである。心が男女のことでいっぱいになるとは、淫鬼がこれを代行していることである。心が憂いでいっぱいになるとは、沈鬼がこれを代行していることである。心が追い回すことでいっぱいになるとは、狂鬼がこれを代行していることである。心が呪詛のことでいっぱいになるとは、奇鬼がこれを代行していることである。心が薬餌のことでいっぱいになるとは、物鬼がこれを代行していることである。このような鬼は、あるものは陰影を身とし、あるものは薄暗いものを身とし、あるものは風を身とし、あるものは気を身とし、あるものは土の人形を身とし、あるものは彩色画を身とし、あるものは老いた家畜を身とし、あるものは壊れた器を身とする。あちらの精とこちらの精がぱつとつかみ合えば、神がこれに応じる。鬼が取り付いて為すことは、ある時は奇怪な事

がわかり、ある時は異常な事がわかり、ある時は吉祥な事がわかるということである。その人は傲慢にも、鬼が身に付いているとは言わず、道が身に付いていると言う。このようなことが長く続くと、ある者は木によって死に、ある者は金によって死に、ある者は縄によって死に、ある者は井戸で死ぬ。ただ聖人は神秘的なことをなしえるが、それは神秘的であっても神秘的なことではない。多くの神秘的な力を使役しその機能を把握しているので、これを会わせたり、散らしたり、制御したりすることができる。太陽は万物に応じるが、その心は静まり返っている。

(35) T23,p.347a。